

1945年 米軍機による日本への 無差別爆撃はなぜ？

2017年8月13日
サンケイニュース
BS1 他

8月15日は日本の敗戦(終戦)記念日……

太平洋戦争末期、東京をはじめとして日本中の都市が空爆され、首都・東京への空襲は100回を超えた。

広島、長崎の原爆を含めて数十万人が犠牲になっている。1945(昭和20)年3月10日の「東京大空襲」を機に、米軍は、一般市民をターゲットにした無差別爆撃に舵を切った。なぜ米軍は人道に反した無差別爆撃へ戦術を転換したのか。

米国で発見された米空軍幹部の肉声テープや関係者への取材で浮かび上がるのは、ゾットするほど単純な組織の論理だ。

当時、米空軍は陸軍の管轄下。空軍、悲願の独立のため、巨額の費用をかけて開発したB29で戦果を挙げる必要があった。

軍需施設への爆撃から無差別空爆に転じたのは、精度があげられない焦りから。本土上陸が迫ると、空軍の力で戦争を終わらせたいという願望が中小都市への焼夷弾攻撃となり、最終的には原爆の使用につながる。

組織内で力を誇示するための爆撃だったのか？ 人間の愚かさと惨劇の落差にめまいがする。



組織の都合で空爆拡大？

1945(昭和20)年1月20日、後に「米空軍の父」と言われる米陸軍航空軍司令官のヘンリー・アーノルド大将(後に空軍元帥)は、爆撃で成果を上げられない日本空爆の指揮官、ヘイウッド・ハンセル准将を更迭し、欧州戦線などの爆撃で成果を上げたカーチス・ルメイ少将(後に空軍大将)を任命した。

ルメイ氏は、それまでの軍需工場への精密爆撃をやめ、一般市民を多数巻き込む無差別都市爆撃を計画した。ルメイ氏は戦後、自著で無差別爆撃を「全ての日本国民は航空機や兵器の製造に携わっている」と正当化している。

さらにルメイ氏は、高度1万メートル近い高高度昼間爆撃から2千メートル前後の低空夜間爆撃に切り替えた。爆弾搭載量を増やすため機銃の大半は取り外させた。3月の時点で護衛戦闘機はなく、もし敵戦闘機に襲われても反撃のすべはない。B29搭乗員の多くは「死の宣告」と受け止めたという。

ただ、無差別爆撃の責任をルメイ氏一人に押しつけるのは酷だろう。背景には、すでに日本陸海軍の組織的反撃は困難となり、米軍が日本本土上陸を想定するようになったことがある。無差別爆撃により日本の厭戦気分を高めるとともに、都市部を壊滅させることで速やかに占領しようと考えたようだ。根底には米陸海軍、そして陸軍から独立を企てる陸軍航空軍(後に空軍)の主導権争いもあったとされる。

無差別爆撃への転換には『米兵の死傷者を少なくしたい』という米政府の思惑がからんでいた。日本への原爆投下の正当化と同じ論理が見てとれる

防衛大学の源田孝教授(軍事史)は「当時ルメイ氏は少将にすぎない。爆撃は全てアーノルド大将の命令で実行された。ルメイ氏は組織人として上官の期待に忠実に応えただけだ。無差別爆撃への転換には『米兵の死傷者を少なくしたい』という米政府の思惑がからんでいた。日本への原爆投下の正当化と同じ論理が見てとれる」と語る。

その証拠に米国は1943(昭和18)年、ユタ州の砂漠に日本の木造長屋を再現し、焼夷弾による燃焼実験を行っている。やはり無差別爆撃は「米国の意思」だったとみるべきだろう。

「わが国政府並びに国民は、非武装市民への爆撃や低空からの機銃掃射、これら卑劣きわまる戦争行為を全力をもって糾弾する」。これはフランクリン・ルーズベルト米大統領が、1939(昭和14)年にソ連軍がフィンランドに無差別爆撃を行った際、発表した声明だ。ルーズベルト氏は東京大空襲直後の1945(昭和20)年4月12日に死去したが、日本全国で繰り返された無差別爆撃、そして広島、長崎への原爆投下をどう抗弁するつもりだったのだろうか。